広島原爆

高堂　泰河

「戦争」という言葉を聞いたとき、僕たちが思う「戦争」と実際に戦争をした人が思う「戦争」では、意味が全く違うと思いました。実際に戦争をした人は、悲しい経験、辛い経験をしていてもしかしたら、楽しい経験をしたことがない人がいるのかもしれません。そんな経験を知らない現在の人が、「戦争」という言葉を簡単に言っていいのでしょうか。

僕は、広島平和大使派遣についての応募を見て、これを機にもっと戦争についてや核爆弾について、どんなに恐ろしいことかを知りたいと思い応募しました。

原爆記念資料館に訪れて、実際に話を聞いてみると、広島に落とされた理由は、三つの条件があったからだと知り驚きました。一つ目は、あまり空襲を受けていないところ。二つ目は、平野が多いところ。三つ目は、捕虜収容所が無いところです。全ての条件があて

はまって広島に原爆が落とされた原因になっていたことが大変残念に思います。さらに、この原爆は、放射能を浴びると大人の被害よりも成長期の子どもの被害の方が大きいことが分かりました。放射能を浴びた子どもは、将来の癌がん幸が子どものときの4倍以上も上がるということも知りました。また放射能は、鉄筋コンクリートを通さないため、原子力爆弾が落とされたときは、鉄筋コンクリートが多い地下や日本銀行などでは、その被害が最小限に抑えられたそうです。この原子力爆弾は、一九四五年八月六日午前八時十五分に落とされ、十六万人強が二ヶ月から四ヶ月のうちに死亡してしまい、さらに長崎にも原爆が落とされてこれを機に日本は、世界で唯一の被爆国になりました。また、原爆で被爆し、白血病で亡くなった女子高生の楮山ヒロ子さんの日記には、「あの痛ましい産業奨励館（原爆ドームのこと）だけが、いつまでも、恐るべき原爆を世に訴えてくれるだろうと

書かれており、原爆ドームを保存するか壊すかの結論が出ないまま、地元の子ども達の団体「広島折鶴の会」は、この言葉に大きな刺激を受け、原爆ドームの保存活動が始まり、広島市議会は一九六六年に永久保存を決定しました。僕自身も楢山ヒロ子さんの言葉に刺激を受け、原爆ドームを残したことは「平和」を象徴することでもあり、もう戦争はしたくないというみんなの思いがあるからなのだと思いました。広島に原爆が落とされたけれど、爆心地から約千三百メートル離れた場所に生えていたアオギリ。原爆の時、さえぎるものがなく熱線と爆風をまともに受け、枝葉はすべてなくなり、幹は半分が焼けました。しかし、翌年の春に芽吹き、このアオギリが芽えたことにより広島に住んでもよいという証拠になりました。原爆の被害がまだ残っていたなら、アオギリが芽生えていなかっただろう。その上、広島に住んでいる人達全員が苦しい思いをしていたかもしれません。

僕は、もう二度と戦争を起こしてはいけないと思っています。戦争をしても一つも得になることはないのに、そんな戦争をしてしまうのかが不思議です。原爆も同じことです。原爆を使い町を破壊する。人を傷つけるためにつくったのか、そんなために人は存在しているのではありません。

今回、広島に行き、今の生活ができている喜びを改めて感じました。

また再び同じことが起きないようにずっと「平和」を願っていながら、自分も平和活動をしていきたいと思いました。